

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：37102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00051

研究課題名（和文）日本・英米との比較から見たフランス現代哲学の主体・人格概念（愛・性・家族を軸に）

研究課題名（英文）The concept of subjectivity and personality in contemporary French philosophy (with a focus on love, sexuality, and family) as compared to Japan, the United States, and the United Kingdom

研究代表者

藤田 尚志 (Fujita, Hisashi)

九州産業大学・国際文化学部・教授

研究者番号：80552207

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：絶えずさらなる流動化にさらされ、何とか安定性を求めようとする現代社会の主体性・人格性を考えるに際して、現代フランス哲学は「分人」概念によって寄与をなしているのではないかと考える。 「分人」とは、それ以上分けて考えることのできない「個人」(individual)ではなく、同時多層的に働く(dividual)存在様態である。本研究では、この概念の源流を18世紀のフランス文学者レチフ、19世紀の思想家フォーリエにまで遡り、20世紀の哲学者ベルクソンのうちに「響存」(echo-sistence)という形で見出されることを確認した。今後は時間意識や記憶の分析哲学との接合を深め、さらにこれらの概念を追求していきたい。

研究成果の学術的意義や社会的意義

人格・主体性概念は社会・政治分野にも教育分野にも大きな影響を及ぼす重大な概念である。一例を挙げれば、数年前に提唱されたDivicracy（分人的民主主義）は投票に「分人」概念を持ち込み、一人一票ではなく、数パーセントずつ分けて投票することを提唱している。将来的には、このような社会政策への提言（とりわけ愛・性・家族に関する提言）につなげられればと考えている。

研究成果の概要（英文）：When considering the subjectivity and personality of modern society, which is constantly exposed to further fluidity and strives for stability, contemporary French philosophy may contribute through the concept of "dividual". "Dividual" refers to a mode of existence that works multilaterally, rather than an "individual" that cannot be further divided. In this study, we traced the origin of this concept back to the French writer Retif de la Bretonne in the 18th century and confirmed that it can be found in the philosophy of Henri Bergson in the 20th century as "echo-sistence". Moving forward, we aim to deepen the connection with the analytic philosophies of time consciousness and memory, and further pursue these concepts.

研究分野：哲学

キーワード：人格性 主体性 現代フランス哲学 分人 愛 性 家族

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景として、近年、現代フランス哲学の研究が急速に進んでいることが挙げられる。1980年代には、ドゥルーズ、フーコー、デリダといった思想家たちは、「主体の解体」を唱えたとされ、伝統的な愛・性・家族概念に対しても否定的な姿勢をとっていると見なされていた。ドゥルーズの「アンチ・オイディプス」に見られるカップルの愛の批判、フーコーの生政治における近代的な性の囲い込み分析、デリダの「弔鐘」やクロソウスキーの「歓待の掟」に見られる「家族の脱構築」などである。だが、近年の研究成果を踏まえて言えば、彼らの一連の分析・考察は、伝統的な主体・人格概念の「否定」ではなく「批判」であり、愛・性・家族をめぐる諸現象とそれらが惹き起こす諸問題の再検討を要求するものである。この再検討は、それが真のアクチュアリティを獲得するためには、その淵源であるベルクソン(時にはさらにそれ以前)に遡りつつ、一方で我々が生きる現代日本社会の文脈と、他方で現代の哲学界で大きな潮流となっている英米系の分析哲学の文脈と接合することを要請する。そこで問題となる学術的問いは、今激しく変容しつつある現代の人間関係、とりわけ愛・性・家族に関する諸現象の理解を可能にする主体・人格概念とはどのようなものであるのか、ということである。

## 2. 研究の目的

本研究は中心的な分析対象として、近現代フランス哲学者たちの愛・性・家族論を取り上げ、一方では近現代日本精神史、他方では現代英米哲学を参照しつつ、すぐれて現代的な問題でもある愛・性・家族の錯綜体が背後に隠し持つ無意識の形而上学を解明するために、主体・人格といった根本的な概念を、優先性や契約といった概念とともに徹底的に再検討することを試みる。彼らのテキストを丹念に読み解いていくことで、今もなお激しく変動しつつある「生の制度」(institutions de la vie)について哲学的な考察を行なうための示唆を得ること。これが本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

**内容面の独自性と創造性** 愛・性・家族を基軸とする人間関係の制度化(生の制度)という観点から、フランス現代哲学の主体・人格概念の再検討を行なう点である。このような焦点化は、愛・性・家族というアクチュアルな問題に対して実践的な寄与を試みると同時に、主体・人格概念の批判的再検討という形で理論的な寄与を試みるものである。例えば、ドゥルーズが近代社会の「個人」(individuel)概念に対置した、現代社会の基礎単位となる「分人」(dividuel)概念を、愛・性・家族をめぐる具体的な諸現象に適用してみるとどうなるのかを検討するという点である。

**形式面の独自性と創造性** まず方法論的な独創性として、フランス現代哲学という中心的な視座だけでなく、**英米系の分析哲学および近現代日本精神史という二つの補完的な視座**から補助線を引くことで、安定的な理論的三点確保が可能になる(詳しくは後述)。次に、成果発表における独創性としては、これまでに培ってきた国際ネットワークを活用し、申請者はProject Bergson in Japanの主要メンバーとして、既にフランス語で4冊、日本語で3冊の成果を刊行している(下記「これまでの研究活動」参照)、本プロジェクトの成果を**日本語のみならず仏・英語で発表**していく。

## 4. 研究成果

絶えずさらなる流動化にさらされ、何とか安定性を求めようとする現代社会の主体性・人格性

を考えるに際して、現代フランス哲学は「分人」概念によって寄与をなしているのではないか。「分人」とは、それ以上分けて考えることのできない「個人」(individual)ではなく、同時多層的に働く(dividual)存在様態である。本研究では、この概念の源流を18世紀のフランス文学者レチフ、19世紀の思想家フーリエにまで遡り、20世紀の哲学者ベルクソンのうちに「響存」(echo-sistence)という形で見出されることを確認した。今後は時間意識や記憶の分析哲学との接合を深め、さらにこれらの概念を追求していきたい。

具体的な成果としては、以下がある。

・著書、論文、翻訳など：

単著『ベルクソン 反時代的哲学』、勁草書房、2022年6月。

共著：檜垣立哉ほか『ベルクソン思想の現在』、書肆侃侃房、2022年12月。

共著：平芳幸浩編『現代の皮膚感覚をさぐる』、春風社、2023年3月。

共著：Yasushi Hirai (ed.), *Bergson's Scientific Metaphysics*, London: Bloomsbury, 5月刊行。

翻訳：アンリ・ベルクソン『1903-1904年度コレージュ・ド・フランス講義 記憶理論の歴史』(平井靖史ほかとの共訳)、書肆心水より夏ごろ刊行予定。

論文(査読有):「Sublime and Panoramic Vision: Bergson, Kant and Heidegger on Schematism」、『*Bergsoniana*』第3号、2023年中に刊行予定。

・研究発表 / 講演：

On Panoramic Memory: Analytic and Bergsonian Perspectives International Workshop "Remembering: Analytic and Bergsonian Perspectives 2" (2022/10/02, 福岡大学)

フーリエ的思考と結婚の脱構築——ベルクソン、ドゥルーズを参照しつつ セッション「フーリエ研究の現在」@社会思想史学会(10/16@専修大学)

On Expressive Personality. Analytic and Bergsonian Approaches Project Bergson in Japan 2022 (11/04@ZOOM)

感覚を計測するとはどういうことか?——カント、フェヒナー、ベルクソン PBJ 主催ワークショップ「精神物理学の起源と展望: フェヒナー、ベルクソン、そして...」(2023/01/07@福岡大学)

Déconstruire - Les revies de Rétif de la Bretonne Colloque international "Les Revies - de Rétif de la Bretonne" (02/23@京都大学・人文科学研究所)

Bergson et Heidegger I: deux voies de l'organologie Séminaire de recherche international "Bergson extrême-orientable : Actualité des études japonaises" dans le cadre de l'IRN CNRS « Un chapitre dans l'histoire globale de la philosophie. Nouvelles perspectives sur le bergsonisme » (03/13, ENS)

Bergson et Heidegger II: deux voies de l'éthique originelle Séminaire "Bergson extrême-orientable" (03/16, ENS)

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 平井靖史・青山拓央・岡嶋隆佑・藤田尚志・森田邦久	4. 巻 53(2)
2. 論文標題 ベルクソンと現代時間哲学（上）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文論叢	6. 最初と最後の頁 495-528
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤田尚志	4. 巻 26
2. 論文標題 リズムの哲学がベルクソンに負うもの	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 フランス哲学・思想研究	6. 最初と最後の頁 61-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藤田尚志	4. 巻 55
2. 論文標題 「大いなる生の息吹…」ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』における呼びかけ・情動・二重狂乱（下）道の途中：二重狂乱と政治	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 仏語仏文学研究	6. 最初と最後の頁 229-246
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Hisashi Fujita	4. 巻 35
2. 論文標題 Diremption and Intersection: The Violence of Language in Bergson and Sorel	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Parrhesia: A Journal of Critical Philosophy	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田尚志	4. 巻 77
2. 論文標題 知的冒険とは何か 講演会へのイントロダクション (第29回国際文化学会報告: 久保田裕之「未来の結婚を哲学する 『最小の結婚』 監訳者にきく結婚の脱道徳化と民主化」への導入として)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 九州産業大学国際文化学部紀要	6. 最初と最後の頁 35-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件 (うち招待講演 9件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 表現的自我: 分析的アプローチとベルクソンのアプローチの接合
3. 学会等名 PBJ-DI分析系分科会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hisashi Fujita
2. 発表標題 On Personality: Analytic and Bergsonian Approaches
3. 学会等名 International Workshop "Time, Freedom, Creativity: Bergsonian Perspectives" organized by PBJ and Barry Dainton (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 講義の時間 ベルクソンのコレージュ・ド・フランス講義を読む
3. 学会等名 日仏哲学会秋季大会シンポジウム「哲学者の講義録を読む」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hisashi Fujita
2. 発表標題 Sublime and Panoramic Vision: Bergson and Heidegger on Schematism
3. 学会等名 Fukuoka Meeting of the Global Bergsonism Research Project (online webinar) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 崇高と走馬灯 ベルクソン、カント、ハイデガーをめぐる超越論的図式機能のゆくえ
3. 学会等名 第49回ベルクソン哲学研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 ベルクソンとリズムの問題
3. 学会等名 日仏哲学会春季・秋季合同大会シンポジウム (秋季)「リズムの哲学：ソヴァネ、ベルクソン、マルディネ」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 声の肌理をどう翻訳するか ベルクソンのコレージュ・ド・フランス講義『時間観念の歴史』翻訳について
3. 学会等名 第46回ベルクソン哲学研究会：『時間観念の歴史』&『物質と記憶』刊行記念ワークショップ「ベルクソンの翻訳をめぐって」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 分身と分人 哲学と文学のあいだで
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会2020年度秋季大会ワークショップ「分身 その増殖のプロセス」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 ベルクソンCdF講義を導入する
3. 学会等名 PBJ (Project Bergson in Japan) 主催「ベルクソンと現代時間哲学『コレージュ・ド・フランス講義1902 - 1903年度 時間観念の歴史』合評会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 結婚の脱構築 ヘーゲル、キルケゴール、マルクス
3. 学会等名 明治大学大学院・教養デザイン研究科での特別講演(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 触覚をめぐる最近の哲学的考察(デリダ、伊藤亜紗) 痒さの哲学に向けて
3. 学会等名 科研費・基盤(B)《「ポスト身体社会」における芸術・文化経験の皮膚感覚についての横断的研究》(課題番号19H01207)研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 図式論と生 ベルクソンとハイデガーにおけるカント解釈をめぐって
3. 学会等名 実存思想協会 2021年3月春の研究会講演会「ベルクソンとハイデガー 「時間観念の歴史」をめぐって」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 ベルクソンの人格概念の再検討に向けて 分析形而上学との接続に関する中間報告
3. 学会等名 PBJ-DI分析系分科会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 ベルクソンの人格概念の再検討 リキエ『ベルクソンの考古学』から出発して
3. 学会等名 PBJ-DI分析系分科会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 「或る生」の哲学とは何か? 秋保亘『スピノザ 力の存在論と生の哲学』(法政大学出版局、2019年)を読む
3. 学会等名 スピノザ協会 第69回研究会 秋保亘『スピノザ 力の存在論と生の哲学』合評会(招待講演)
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 The range of the voice: Towards a Bergsonian theory of Personality
3. 学会等名 "Remembering: Analytic and Bergsonian Perspectives" (Franco-Japanese workshop) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 Coup de sonde, coup de genie : PBJ (Projet Bergson au Japon), traduction japonaise, quelques reflections sur le cours
3. 学会等名 "Bergson : L ' evenement des cours au College de France" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤田尚志
2. 発表標題 ベルクソンの「可能性の条件」とは何か？ 岡嶋隆佑「自由行為の哲学 初期ベルクソン哲学における時間と空間 」を読む
3. 学会等名 三田哲学会シンポジウム「ベルクソンと自由 時間・空間から自由へ」(招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 藤田尚志	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 624
3. 書名 ベルクソン 反時代的哲学	

1. 著者名 アンリ・ベルクソン	4. 発行年 2022年
2. 出版社 書肆心水	5. 総ページ数 446
3. 書名 記憶理論の歴史	

1. 著者名 アンリ・ベルクソン	4. 発行年 2019年
2. 出版社 書肆心水	5. 総ページ数 446
3. 書名 コレージュ・ド・フランス講義 1902-1903年度 時間観念の歴史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Project Bergson in Japan <a href="https://matterandmemory.jimdofree.com/">https://matterandmemory.jimdofree.com/</a>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	宮野 真生子  (Miyano Makiko)  (40580163)	福岡大学・人文学部・准教授   (37111)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 "Remembering: Analytic and Bergsonian Perspectives" (Franco-Japanese workshop)	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 "Bergson : L'evenement des cours au College de France" Journee d'etude organisee par la Societe des amis de Bergson	開催年 2019年～2019年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------